## 教育に関する調査研究

### Ⅰ　研　　究　　主　　題

### 子どもが話し合う、子どもが動き出す、とっておきの学級活動
### ―クラスづくりは学級会から―

### Ⅱ　主　題　設　定　の　理　由

近年 SNS が子どもたちの日常に当たり前に存在し、新しい出会いをもとめたりすること以外にも既存の人間関係を維持したり、深めたりすることにも利用されている。SNS での関係は、気軽に話ができるので便利といった点や深く関わらずにすむので楽などのメリットもあるが、その反面困ったときに相談できるような強いつながりをもつことができない、自分や相手の気持ちが伝わりにくいなどのデメリットもある。SNS が普及した現在、子どもたちの人間関係は強い信頼関係で結ばれるというよりもむしろ希薄になりつつある。そういった社会に生きる現在の子どもたちには、お互いの個性や考え方、表現の仕方などを認め合うことにより、自己の存在感を実感することができるとともに自尊感情を高め、お互いに長所を生かして協力したり、短所を補ったり、また、不安や悩みに寄り添って支え合うことにより安心して過ごすことのできる人間関係のある環境が必要である。とくに学級活動はそのような環境をつくる活動の中核であり、学級の身近な問題をみんなで共有し、考え、話し合い、合意形成をしていく、さらに合意形成したことをみんなで実践して振り返って次の実践に生かすなどの活動の積み重ねをし、よりよい人間関係を築いていくような活動が今こそ必要である。

本市は、人口 85,107 人（令和４年３月現在）を抱える田園都市である。京都や大阪などの大都市の通勤圏内でもあり、ベッドタウンとしての機能も果たしている。そういった背景もあり、人口は年々増加しており、さまざまな価値観をもった人々が共に生活している。教育現場においても同様で、さまざまな環境で育ってきた児童生徒がいる学校では、考え方や意見の違い等を理解することや認め合うことが一層大切になってくる。

令和３年度の全国学力・学習状況調査によると、本市の小学校児童においては、「自分の思っていることや感じていることをきちんと言葉で表すことができるか」の質問に「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童は、全国 70.3%に対し、本市は 68.3%とやや少なかった。また、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思うか」の質問に当てはまると回答した児童の割合は、全国 26.6%に対し、本市は 24.4%とこちらもやや少なかった。このことからも、自分の考えを相手に伝えたり、他者の考えの良さや可能性に気づいたり、互いに認め合いながら合意形成をしていく力を育む必要があると考える。

学級の身近な問題をみんなで共有し、考え、話し合い、合意形成をしていく学級会は、学級活動の基盤となる話合い活動であり、色々な考えを交流して互いに認め合うことは、みんなが過ごしやすい学級にするために大切なことである。また、児童が安心して自分の思いを言える雰囲気、過ごしやすい学級だと感じることは、近年増加傾向にある、不登校やいじめの未然防止にもつながると考える。

昨今ベテラン教員の大量退職時代を迎え、多くの若い教員が採用されており、本市においてもそれは同様で、特に小学校担任の平均年齢が下がりつつある。新規採用者や経験の浅い若手教員の中には、自身の力量に対して不安を抱えている者も少なくない。また、ある程度の教職経験を積んではいるが、話合い活動に自信がもてない教員もいる。話合い活動の重要性は理解していても、どのようなシステムで活動を進めていけばよいのか、教師の関わりはどの程度必要なのか、どのように合意形成

していけばよいのか、よくわからないまま、何となく活動だけが行われていることもある。話合い活動を積極的に推進し、充実した取組を行っている教員も多くいるが、話合い活動の具体的な進め方を学ぶ機会が少ないこともあり、学年や学校全体で、話合い活動の実践が十分に積み上げられていないことが本市の課題となっている。そこで、本研究では、学級活動をシステム化することによって、子どもたちが自ら課題を見つけ、主体的に話し合う力の育成を図る。さらに、話し合ったことをみんなで協力して取り組み、その中で振り返りをし、次の実践につなげることで、学級活動を充実させたいと考える。また、話合い活動の進め方を一定程度共通理解して実践を積み上げていくために、話合い活動リーフレットを作成し、市内小学校に配布し、学級活動のさらなる充実に役立てたいと考える。

## Ⅲ　研　究　の　目　標

学級活動をシステム化し、子どもが自ら課題を見つけ、主体的に話し合い、実践する力の育成を図る。

また、市内で共通理解して実践するために、話合い活動リーフレットを作成する。

## Ⅳ　研　究　の　仮　説

学級活動をシステム化することで、子どもが自ら課題を見つけ、主体的に話し合い、実践する力の育成が図られるであろう。

## Ⅴ　研究についての基本的な考え方

### Ⅰ　特別活動において育成をめざす資質・能力

小学校の学習指導要領（平成 29 年告示）には、特別活動の目標について、以下のとおり明記されている。

> 集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。
>
> (1)　多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
> (2)　集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
> (3)　自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

また、特別活動における集団活動の指導に当たっては、「いじめ」や「不登校」等の未然防止等も踏まえ、児童一人一人を尊重し、互いのよさや可能性を発揮し、生かし、伸ばし合うなど、よりよく成長し合えるような集団活動として展開しなければならないとある。

特別活動では、学んだことを人生や社会での在り方と結び付けて深く理解したり、これからの時代に求められる資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることをめざしている。特別活動で育む資質・能力は、各教科等で育む資質・能力と同様に、三つの柱（「知識

及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」）に沿って整理されている。

（１）「知識及び技能」

多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動をする上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。

具体的には、次のように知識や技能を身に付けていくことが考えられる。

・集団活動のよさや社会の中で果たしている役割、自己の在り方や生き方との関連で集団活動の価値を理解すること。
・集団や人間関係をよりよく構築していく中で大切にすべきことを理解し実践できるようにすること。
・将来、自立した生活を営むことと現在の学習がどのように関わるかということを理解し、現在自分でできることを意思決定し、実践していくこと。

（２）「思考力、判断力、表現力等」

集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。

具体的には、様々な集団活動の中で、次のようなことができるようにすることが考えられる。

・様々な場面で、自分自身及び自分と違う考えや立場にある多様な他者と、互いを認め合いながら、助け合ったり協力し合ったりしていくこと。
・自分自身や他者のよさを生かしながら、集団や社会の問題について把握し、合意形成を図ってよりよい解決策を決め、それに取り組むこと。
・自己のよさや可能性を発揮し、置かれている状況を理解し、意思決定することや、将来を見通して自己の生き方を選択・形成すること。

（３）「学びに向かう力、人間性等」

自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

具体的には、次のような態度を養うことが考えられる。

・多様な他者の価値観や個性を受け入れ、助け合ったり協力し合ったりして、よりよい人間関係を築こうとする態度。
・集団や社会の形成者として、多様な他者と協働して、集団や生活上の諸問題を解決し、よりよい生活をつくろうとする態度。
・日常の生活や自己の在り方を主体的に改善しようとしたり、将来を思い描き、自分にふさわしい生き方や職業を主体的に考え、選択しようとしたりする態度。

## ２　特別活動の果たす役割

特別活動は、児童生徒による自発的、自治的な活動を通して、学級や学校におけるよりよい生活や人間関係をつくるとともに、お互いを尊重し、認め合う支持的な風土を築いてきた。支持的風土のある学級においては、子どもたち一人ひとりに居場所があり、安心して思いが出せる場が保障されている。児童生徒が「友達の話をじっくり聞きたい」「自分の考えを最後まで聞いてもらえる」

と感じることができ、温かい人間関係が形成されているため、自尊感情も高まってくる。このように自分や他者を大切にする気持ちを育むことは、いじめの防止や抑止力にもつながるのではないかと考えられる。また、例えいじめが起こったとしても、自分たちの課題を見つめ、協働しながら正しく解決しようとするのではないだろうか。さらに、児童生徒がよりよい自分や学級・学校生活、人間関係を築く活動を通して、複雑で変化の激しい社会を「生きる力」を獲得していくという意味でも、特別活動の役割は大変大きなものであると考える。

## 3　学級活動の内容について

学級活動は、学校生活において最も身近な所属集団である「学級」を基盤にした活動である。

学級活動においては、学級や学校での生活をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図り、役割を分担して協力して実践したりして、学校生活の充実と向上を図っている。

学級活動には(1),(2),(3)の三つの内容があり、学習指導要領には、次のように示されている。

(1)学級や学校における生活づくりへの参画

ア　学級や学校における生活上の諸問題の解決

学級や学校における生活をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い合意形成を図り、実践すること。

イ　学級内の組織づくりや役割の自覚

学級生活の充実や向上のため、児童が主体的に組織をつくり、役割を自覚しながら仕事を分担して、協力し合い実践すること。

ウ　学校における多様な集団の生活の向上

児童会など学級の枠を超えた多様な集団における活動や学校行事を通して学校生活の向上を図るため、学級としての提案や取組を話し合って決めること。

(2)日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全

ア　基本的な生活習慣の形成

身の回りの整理や挨拶などの基本的な生活習慣を身に付け、節度ある生活にすること。

イ　よりよい人間関係の形成

学級や学校の生活において互いのよさを見付け、違いを尊重し合い、仲よくしたり信頼し合ったりして生活すること。

ウ　心身ともに健康で安全な生活態度の形成

現在および生涯にわたって心身の健康を保持増進することや、事件や事故、災害等から身を守り安全に行動すること。

エ　食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成

給食の時間を中心としながら、健康によい食事のとり方など、望ましい食習慣の形成を図るとともに、食事を通して人間関係をよりよくすること。

(3)一人一人のキャリア形成と自己実現

ア　現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成

学級や学校での生活づくりに主体的に関わり、自己を生かそうとするとともに、希望や目標をもち、その実現に向けて日常の生活をよりよくしようとすること。

イ　社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解

清掃などの当番活動や係活動等の自己の役割を自覚して協働することの意義を理解し、社会の一員として役割を果たすために必要となることについて主体的に考えて行動すること。

ウ　主体的な学習態度の形成と学校図書館等の活用

学ぶことの意義や現在及び将来の学習と自己実現とのつながりを考えたり、自主的に学習する場としての学校図書館等を活用したりしながら、学習の見通しを立て、振り返ること。

学級活動の基本的な学習過程は、学級活動(1)と(2)(3)の二つに分けることができる。各活動の特質に即し、教師の適切な指導の下、自主的、実践的な活動を積み重ねることで、児童の自治的能力や自己指導能力、自己実現の力を高めていく。とくに学級活動(1)の内容においては、児童が自分たちの学級や学校の生活をよりよくするために、問題を発見し、課題を見いだし、話し合い、合意形成したことを協働して取り組むとともに、一連の活動を振り返り、次の課題解決へつなげることを通して自治的能力を育てていく。学級会の実践は、この内容に深く関わっており、子どもが自ら課題を見つけ、主体的に話し合う力の育成を図り、学級活動を充実させるためには、学級活動(1)がポイントとなるので、学級会の実践は大変重要な活動と位置付けられる。

**４　学級会の実践について**

（１）　事前の活動についてのポイント

学級会の議題の選定から事前の予告、振り返りまでをシステム化することで、児童が自ら課題を見つけ、主体的に話し合う力の育成が図られると考えられる。学級会では、次のようなことをシステム化（準備）しておく必要がある。

| | |
|---|---|
| ○議題カードの設置 | ○議題選定の時間設定 |
| ○学級会ノートの準備 | ○計画委員会の実施 |
| ○司会グループの輪番制 | ○学級会カードに事前に記入する時間の設定 |
| ○学級会の予告 | ○議題集めから学級会までの流れを子どもが理解している |

議題は、子どもが自ら課題を見つけ、議題として提案するシステムをしっかりとつくっておく。議題の内容については、学級生活がもっとよくなることや、みんなでしたいこと、つくりたいものはないかなど、生活の中から議題を見つけることが大切である。より切実感・必要感のあるものにすると、子どもの話合いの本気度が高まり効果的である。さらに、議題は学級の全員に提示し、全員で議題を決定する。また、学級会の予告を黒板などを使って行うことで、学級全員が、議題の内容や話し合うことを意識できる。さらに事前に学級会オリエンテーションを行い、提案理由やめあてに基づいて、一人ひとりが自分の考えを発言することや、学級会の時間配分や進め方を共通理解しておくこともポイントとなる。

（２）　本時の活動・話合い活動についてのポイント

提案理由は提案者から説明するが、合意形成をするために重要になってくるので、なぜこのことを話し合うのか、話し合う目的が明確になるように、事前の計画委員会でしっかりまとめておく。

話合いは、「出し合う」（一人ひとりが自分の考えを出し合う。）、「くらべ合う」（それぞれの考えのよさや心配なところをくらべ合いながら話し合う。質問や賛成・反対の意見を出し合ってそれぞれの意見のメリット、デメリットを認識し合う。）、「まとめる」（どの考えがよいか合意形成を図る。）を意識して進めていく。「出し合う」の段階で「くらべ合う」発言が出たりするとわかりにくいので、司会に助言しながら、しっかりと切り替えて進めさせることが大切である。

合意形成の際には、賛成・反対の意見を中心にしながら、どのよさをとるかや、心配なところは解決策を考えたり、条件をつけて折り合うようにしたり、よいところを合わせて採用するなど、さまざまな形で合意形成をしていく。一つの案について続けて意見が出てくると合意形成につながってくることもポイントである。

教師の評価は、子どもたちの話合い活動に取り組む姿勢につながってくるのでとても大切である。教師の始めの話では、提案理由の補足や前回の学級会の成果や課題に触れ、終わりの話では、学級会で誰のどの意見が、どのようによかったかを具体的に評価する。次の例のような子どもの発言を取り上げて評価していくと、子どもの実践意欲がさらに高まる。

☆提案理由に触れる発言
☆～さんの立場（みんなの立場）になった発言
☆譲り合う、折り合う発言
☆新しい方向性を出す発言
☆友だちの意見を聞いて考えが変わった子の発言
☆困難や現実問題に触れる発言、本音の発言
☆話合いをまとめようとする発言
☆話合いが論点からずれた時、元に戻そうとする発言

※話合い活動リーフレットの中にも掲載している。

（３）　事後の活動についてのポイント

話し合って決まったことや分担した係などを学級活動コーナーに示すなどして、常に確認できるようにし、全員で協力し合って実践していく。さらに、特別活動ノートに振り返りの欄をつくるなどして、児童が実践の振り返りを行うことができるようにし、実践の様子や振り返りを学級活動コーナーに掲示したりする。実践の振り返りをすることで、新たな課題がでてきたり、次の実践にむけて意欲的に活動するようになる。このような活動をすることで、次の学級会や実践がさらに充実したものになっていく。

## ５　自尊感情の捉え方

主題設定の理由の中で、「現在の子どもたちには、お互いの個性や考え方、表現の仕方などを認め合うことにより、自己の存在感を実感することができるとともに自尊感情を高め、お互いに長所を生かして協力したり、短所を補ったり、また、不安や悩みに寄り添って支え合うことにより安心して過ごすことのできる人間関係のある環境が必要である。」と述べたが、ここでいう自尊感情とは、おもに基本的自尊感情とよばれるものを想定している。この基本的自尊感情とは、近藤卓のいう自尊感情の２つの領域のうちの１つである。

近藤(2013)は、自尊感情は２種類からなるとしている。一つは、うまくいったりほめられたりすると高まるが、失敗したり叱られたりすると途端にしぼんでしまう「社会的自尊感情(Social Self Esteem：SOSE)」、もう一つは、成功や優越とは無関係で、あるがままの自分自身を受け入れ、自分をかけがえのない存在として、丸ごとそのままに認める「基本的自尊感情(Basic Self Esteem:BASE)」である。社会的自尊感情がつぶれてしまったときに、心を支えてくれるのが基本的自尊感情であり、この基本的自尊感情こそが、自尊感情の基礎を支える大切な感情だと近藤は述べている。また近藤は、基本的自尊感情は、体験と感情を共有することの繰り返しで和紙を重ねていくように少しずつ形成されると述べている。あらゆる感情を、身近な人と共有することができれば、それによって自分の感じ方を受け入れ、自分を受け入れて、基本的自尊感情が少しずつ育まれていくのである。したがって、学級会において、学級の身近な問題をみんなで共有し、考え、話し合い、よりよい合意形成をしていくことの積み重ねが、基本的自尊感情を育て、複雑で変化の激しい社会を「生きる力」をつけていくことにつながると考える。

# Ⅵ 研 究 の 進 め 方

## １　研究の方法

（１）市内小学校から推薦された教員、指導講師、教育研究所所員で研究協力員会を組織する。
（２）研究協力員の協力のもと、話合い活動リーフレットの内容を検討する。
（３）研究協力員は、よりよい話合い活動の実践を各校で実施する。
（４）よりよい実践のための「話合い活動リーフレット」を作成し、市内小学校に配布する。

## ２　研究の経過

| 時期 | 内　　容 | |
|---|---|---|
| ４月～５月 | 研究構想の策定 | ・研究主題の決定と研究計画の立案<br>・指導講師、研究協力員の依頼と委嘱 |
| ５月～11 月 | 話合い活動についての調査 | ・授業実践による調査<br>・聞き取り調査 |
| ７月１日 | 第１回研究協力員会 | ・研究概要や進め方の説明 |
| ７月～８月 | 第１回アンケートの実施 | ・アンケートの実施と分析 |
| ９月～11 月 | リーフレットの計画 | ・リーフレットの原案作成 |
| 11 月 22 日 | 第２回研究協力員会 | ・リーフレットの内容検討 |
| 12 月 | 第２回アンケートの実施 | ・アンケートの実施と分析 |
| １月～３月 | 研究のまとめ | ・研究紀要の完成<br>・リーフレットの完成 |

# Ⅶ 研 究 の 内 容

本研究では、研究の始期と終期に、市内小学校の通常学級担任 126 人を対象に、学級会の実践に関するアンケート調査を実施し、本市の学級会実践の現状や課題について把握する。それをもとに話合い活動リーフレットの内容を検討し、学級活動のさらなる充実に役立てるものとする。

## １　アンケート調査や聞き取り調査から見える本市の学級会の実践について

（１）　市内小学校通常学級担任の内訳

１年～５年目までの経験年数の教員が、53 人と半数近くを占めている。６～10 年目までの教員を含めると、87 人となり、およそ７割の担任が 10 年目までの若手教員であることがわかる。（図１）11 年以上の教員は、全体の３割にとどまっている。

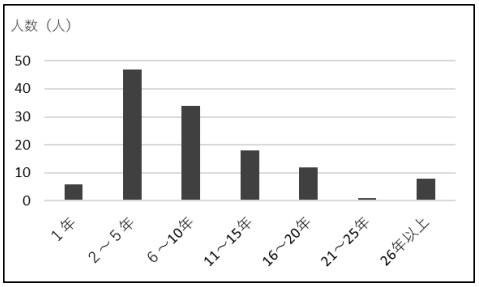

図１：市内小学校通常学級担任の教職経験年数

①　学級会の実践について

およそ6割の担任が、積極的に実践していると答えており（図2）、本市では、学級会の実践は一定程度浸透していると考えられる。昨年度の学級会の実施回数（初任者については今年度の実施予定回数）は、4～6回が最も多くなっている。ちなみに学級会の回数は、多ければ多いほどよいというわけではないが、指導講師の小川 宏「特別活動」推進員によれば、子どもに自ら課題を見つけ、主体

的に話し合い、実践する力を育成するためには、1年間で8回を目標に、理想は 10 回以上とのことである。そのことをふまえて結果を見てみると、7回以上実施した担任の割合は、半数以下となっており、学級会の回数についてはやや少ない傾向が見られる。（図3）

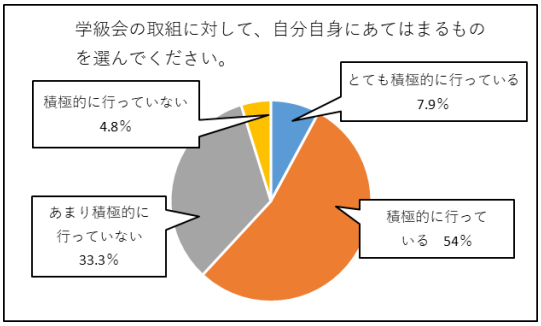


図2：自分自身の学級会の取組について

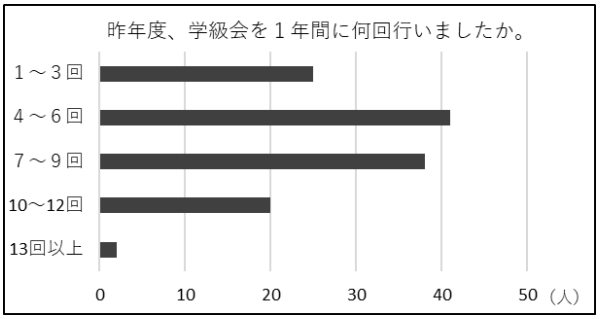


図3：昨年度の学級会の回数

学級会の取組について「積極的に行っていない」と回答した教員に理由をたずねたところ、「時間の確保が難しい」という回答が最も多かった。次に多かったのは、「学級会をどのように進めていいかわからない」という実践に不慣れであることがうかがえる回答であった。また、学級会のシステム化に関する項目では、80%以上の教員が肯定的な回答をした項目の数は、21 項目中8項目であった。また、これらの項目の回答を、教職経験年数「1～5年」と「11～15年」の教員に分けて見てみると、「11～15 年」のベテラン教員の方が学級会のシステム化がかなり進んでいる結果がみられた。

この結果から、ベテランの学級担任の減少にともなって、話合い活動の具体的な進め方を若手教員が学ぶ機会が少なくなり、学年や学校全体で、学級会の実践が十分に積み上げられていない本市の課題が見える。

## （2） 調査から見える学級会実践の重要性

① 教師アンケートより

学級会のシステム化に関するアンケート項目のうち、半分以上システム化している教員、半分以上システム化していない教員に分類し、学級会の実践に関して、子どもにどのような成長が見られたかを調査し、次のような結果が見られた。（図4）（図5）

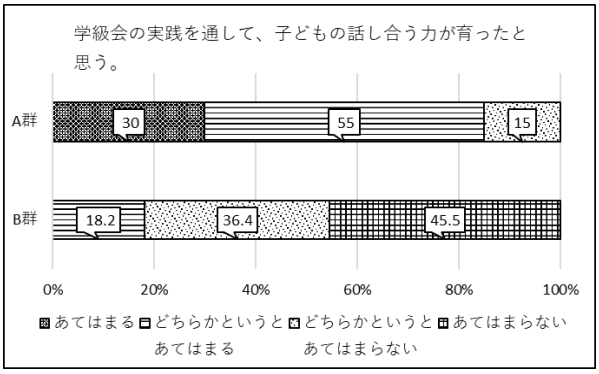


図4：子どもの話し合う力について

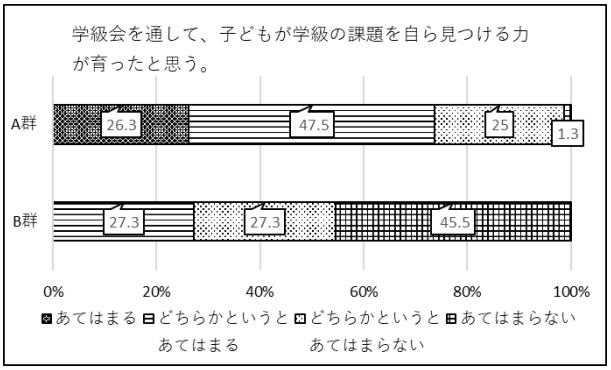


図5：子どもが課題を自ら見つける力について

| | |
|---|---|
| A群 | 学級会のシステム化に関するアンケート項目のうち、半分以上システム化している教員 |
| B群 | 学級会のシステム化に関するアンケート項目のうち、半分以上システム化していない教員 |

② 児童アンケートより

研究協力員の学級の児童対象に、「学級会での話合い活動を通して、4月とくらべて自分自身がどのように変わったか」を調査し、次のような結果が見られた。（図6）（図7）

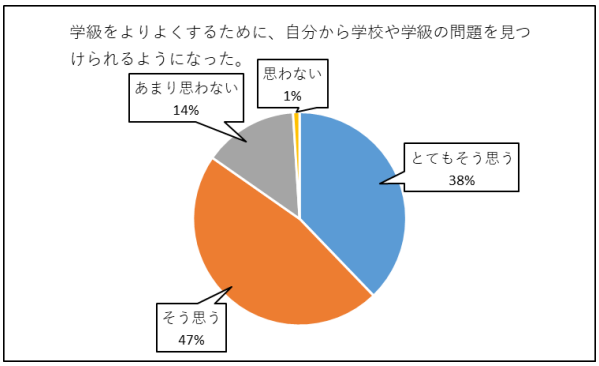


図6：課題が見つけられるようになったか

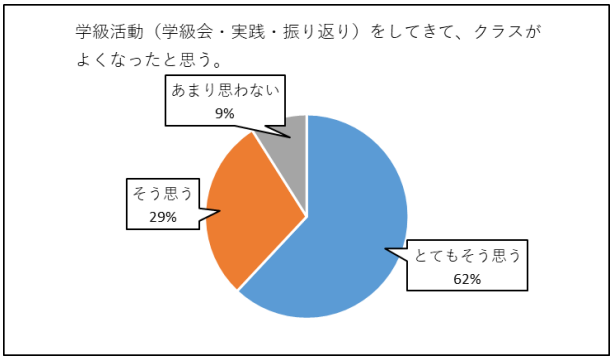


図7：クラスがよくなったと思うか

③ 研究協力員への聞き取り調査より

研究協力員には、学級会の実践についてと、学級の子どもの変化について聞き取り調査を行った。研究協力員は、1年間大変熱心に学級会の実践を行っていた。学級会の実践を継続したことで、普段の生活の中で起こった問題を子どもたちが自ら話し合って解決しようとする姿が見られるようになったり、自分からやってみることで学級が変わることを学級会の経験から気づき、自分から動く子どもが増えたりしたといった子どもの大きな成長を実感したようだった。また、そんな子どもの成長を目の当たりにして、「学級会は必要である」と強く訴えた研究協力員もいた。ある研究協力員の学級では、「学級会が好き」という子どもの発言が学級会の中で見られ、その言葉通り、子どもが生き生きと話し合っている姿が見られた。私自身も、研究協力員の学級会を1年間参観させてもらったが、どの学級でも回を重ねるごとに、子どもたちが力をつけていっていると感じた、また、以前はなかなか発言しにくかった子どもが、堂々と自分の思いを発言できるようになった姿を見ることもできた。学級会を中心とした学級活動が、よりよい学級づくりの土台になっていることを実感した。

## Ⅷ 研 究 の ま と め

本市では、小学校の学級担任のおよそ半数が、5年目までの教員で占められ、7割以上が 10 年目までの若手教員となっている。年々、ベテラン教員の担任が減り、若手の担任同士で多くのことを相談・共有することも多くなっている。また、忙しい日々の中で、若手教員がベテラン教員からさまざまなことを学ぶ機会が少なくなっており、学級会の実践についても同様のことがいえる。そういったことから、本市では、学級会の実践が学年や学校全体で、十分に積み上げられていない現状がある。しかし、本研究の実践から、学級活動をシステム化することによって、子どもが自ら課題を見つけ、主体的に話し合う力の育成が図られ、よりよい人間関係を築いていくことができると考えられる。学級会は、そのような人間関係を築くための基盤となる活動であり、よりよい学級づくりの土台となっている。したがって学級会をシステム化することは、子どもの力の育成を図り、学級に安心して自分の思いを言える土壌を醸成し、近年増加傾向にある、不登校やいじめの未然防止にもつながっていくと考える。

**【引用・参考文献】**

1）今宮信吾・田中博之(2021)
『学級力向上プロジェクト』金子書房
2）近藤卓(2013)
『子どもの自尊感情をどう育てるか―そばセット(SOBA-SET)で自尊感情を測る』ほんの森出版
3）滋賀県総合教育センター(2014)
『滋賀県版　学級経営スタートブック（小学校学級活動編）』
4）文部科学省(2018)
『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』東洋館出版社
『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別活動編』東洋館出版社
5）文部科学省　国立教育政策研究所　教育課程研究センター(2021)
『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる　特別活動　小学校編』文溪堂

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 指導講師 | 小川　宏 | 〔学校教育課　「特別活動」教育推進員〕 | | |
| 研究協力員 | 井上　理奈 | 〔守山小学校〕 | 宇野　利哉 | 〔速野小学校〕 |
| | 谷口　翔 | 〔吉身小学校〕 | | |
| 教育研究所 | 中道　裕恵 | 脇阪　久徳 | | |
| 担当所員 | 折木　公美 | | | |

**話合い活動リーフレットについて**

学級会の実践について、「事前の活動」、「当日の活動」、「事後の活動」についての指導のポイントや実践例を、写真や動画とともにまとめている。また、アンケート調査で得られた回答を元に、Q&A コーナーを設け、学級会の実践についての悩みなどに答えている。